

研修日程（現地時刻） 時差 - 1 時間 （日本 17 時 = 台湾 16 時）

月/日(曜)	行程・研修先	現地時刻	実施内容	備考
2026 年 03/15(日)	仙台空港着 仙台空港発 桃園国際空港着 桃園国際空港発	14:50 17:15 20:35 21:30 23:00	仙台空港集合 ✈ 空路、台北・桃園空港へ… (4 時間 20 分) 空港到着後、入国審査 審査後、現地ガイドと合流 バスにてホテルへ移動 ホテルチェックイン	夕食：機内食 【台中 泊】
03/16(月)	台中市滞在	07:30 08:15 17:00 17:30	ホテル出発 国立南投高級中学到着 午前：ポスター発表、体験授業 午後：討論会、交流会 ホテルへ移動 ホテル到着・研修報告書作成	朝食：ホテル 昼食：校内 夕食：各自 【台中 泊】
03/17(火)	台中・新竹市滞 在	09:30 10:00 13:30 15:00 17:00	ホテル出発 921 地震教育園区 地震のメカニズムと防災科学について学習・昼食 国立清華大学清華会館へ移動 国立清華大学到着 国立清華大学清華会館・大学施設見学 研修報告書作成	朝食：ホテル 昼食：レスト ラン 夕食：各自 【新竹 泊】
03/18(水)	新竹市滞在	09:00 09:30 12:00 14:00 16:00 17:00	国立清華大学清華会館出発 国立清華大学脳科学研究センター ナノテクセンター施設見学・講義聴講 昼食 国立清華大学先住民科学開発センター 施設見学・講義聴講・体験学習 国立清華大学清華会館到着 研修報告書作成・口頭発表準備	朝食：各自 昼食：各自 夕食：各自 【新竹 泊】
03/19(木)	台北市滞在	09:00 12:30 15:00 16:00 18:30 19:30	国立清華大学清華会館出発 台北市内観光 (バス) 故宮博物院・国立中正紀念堂見学 国立中正紀念堂見学・昼食 九分へ移動 九分到着・散策 ホテルへ移動 ホテルチェックイン・研修報告書作成	朝食：各自 昼食：各自 夕食：各自 【台北 泊】
03/20(金)	台北市滞在	09:00 09:15 12:30 12:45 14:00 19:00	ホテル出発 台北市立芳和実験中学 ポスター発表・討論会・交流会・昼食 ホテルへ移動 ホテル到着 研修報告書作成 夜市見学・夕食	朝食：ホテル 昼食：学食 夕食：各自 【台北 泊】
03/21(土)	桃園国際空港着 桃園国際空港発 仙台空港着	08:30 10:00 11:50 16:00	ホテル発 MRTにて桃園国際空港へ 桃園国際空港到着 ✈ 空路、仙台空港へ 仙台空港着 解散式	朝食：ホテル 昼食：機内食

【3月16日（月）】 南投高級中学を訪れた。

歓迎式

バスの窓から見えた南投高級中学の校門にざわつく声。なんだなんだと覗いてみたら、大勢の南投生が校門で私たちを出迎えてくれていた。前日の夜中に台湾に着き寝不足や疲労を引きずる私たちの心を癒やしハートフルな気持ちにさせてくれた。その後に執り行われた歓迎式でも熱烈に歓迎してくれた。



ポスター発表

お互いにポスター発表をした後、質疑応答を行った。南投の高校生と私たち一高生はまだ出会ったばかりで、まだ緊張した雰囲気でありながらも、一人一人この時間を有意義なものにしようと頑張っていた。真剣な眼差しで目の前の発表を必死に理解しようとする姿や、目の前の聴衆に目線を送りつつ投げかけられた質問や疑問にも真摯に対応する姿、さらには南投生と一高生が英語で発表内容に対して議論する姿など、思わず「Nice!」と言いたくなるような場面がたくさん見られた。

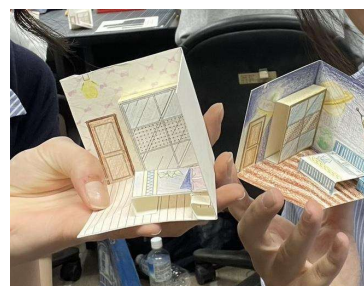
Lunch Time

主食がお米で、野菜やお肉もあり、日本の食事と似ている点もあったが、おかずはしょっぱかったり辛かったりするものが多かったり、お弁当の箱が紙パックだったりするのが日本のお弁当と違って興味深かった。また、米やおかずの量がかなり多く、食べきれない人もいたが、お残しに結構寛容な雰囲気だったのが意外だった。全部台湾っぽい独特な味がしてとてもおいしかった。



my room 作り

楽しい昼食の後は、my room 作りをした。デザイン科の生徒たちが中心になって説明をしてくれて、一人一部屋を自分好みにデザインするという活動を行った。それぞれの個性が現れていて、デザインをきっかけに、好きな色やキャラクターなどの会話にも花が咲いた。みんなとの思い出を形に残すことができ嬉しく思った。



【感想】

英語でのポスター発表ではポスターを読んで大事なところを見つける力や、発表を聞いて質問を考えて英語で伝える力などが身についたと思う。パディとの会話では即興で完璧な英語を話したり、聞き取ったりすることは難しかったが、パッションや時には翻訳アプリを使ったりしてなんとかコミュニケーションをとることができたのがとてもうれしかった。

特に昼食と my room 作りが印象に残った。昼食が日本とは異なりユニークだった。my room 作りでは、言葉が通じなくてもコミュニケーションを取れることもあると気づかされた。また、それぞれ個性があって、絵には言葉が関係なくて、違いが面白かった。これを通して、人間は言語の垣根を超えて絆を高めることができるということがわかり、これからの国際交流の在り方を考えるヒントになると考えた。

【3月17日（火）午前】 台中市内にある 921 地震教育園區を訪れた。

921 大地震

1999年9月21日午前1時47分ごろに台湾中部の南投県集集镇付近を震源としてマグニチュード7.6の地震が起きた。台湾では20世紀最大の大地震といわれている。内陸の活断層である車籠埔断層が大きくずれ動いたことが原因だった。強い揺れと活断層の大きなずれにより、多くの建物が倒壊し、約2,400人以上が死亡、1万人以上が負傷するなど、台湾史上でも最大級の被害が発生した。さらに、電気・水道・通信といったライフラインも大きな被害を受け、復旧までに長い時間がかかった。山間部では孤立する集落もあり、救助活動は難航した。

この経験を受けて台湾では、防災意識の向上や耐震基準の強化、地震観測体制の整備などが進められた。現在では学校や地域での防災訓練も積極的に行われており、災害に強い社会づくりが進められている。

施設について

921 地震教育園区は、1999 年に発生した 921 大地震の被害をそのまま保存した、防災および自然科学の教育施設である。断層のずれや校舎の倒壊、地表の隆起などが現地に保存されており、地震の影響を視覚的かつ実体的に理解することができる。2007 年に完成し、車籠埔断層保存館、地震工学教育館、映像館、防災教育館、再建記録館など複数の展示施設から構成されている。それぞれの施設では、地震の仕組みや耐震技術、災害時の対応、さらに震災後の復興過程などが体系的に紹介されている。また、本園区の特徴として、断層線に沿った建築設計が挙げられる。被災した校舎と新たな展示施設を一体化させることで、地震による地形変化や被害状況をより明確に示している。これにより、来館者は自然科学・人間社会・歴史の三つの観点から地震を総合的に学ぶことができる。



【感想】

学校があったところがこんなに大きな被害を受けたことを知って、災害の恐ろしさを再認識できた。特に平坦な道や平らなプールが坂になっていたり、線路が大きく曲がっていたりしたのを見て、衝撃を受けた。ここは、悲惨な現場をあえて残すことで人々に学びと記憶を与えているので、ずっと残ってほしいと思ったし、辛いことだが目を背けないことが大切だと感じた。また、自分達も 3.11 という大災害を経験してきたので、同じ被災者としてこのことを忘れずに後世に伝えられたら良いと思った。

日本で生きてると地震そのものよりもその後発生する津波や火災を危険視しがちだが、921 地震では地面のずれによって家屋の倒壊が発生したということを知り、断層の場所を把握することも防災になるのではないかと思った。921 地震によって、普通の道路が坂になり、川には小さな滝ができるなど変化しており、普段私たちが暮らしている文明も自然の中にあり、自然に抗うことはできないのだと改めて実感させられました。震災遺構がただの観光スポットにならないように、どんな地震だったのか、それによって何が失われたのかについてしっかりと語り継ぎ、地震の教訓を学ぶ場所であり続けるべきだと強く思った。

【3月17日（火）午後】 国立清華大学を訪れた。

清華大学の紹介

国立清華大学は 1956 年に台湾で再興された長い歴史を持っており、学生数は約 16,000 人にのぼる。敷地面積は約 1,220,000 平方メートルで、広大な敷地内には多くの講義棟や研究室、学生寮がある。移動方法としては、車、バス、自転車があるようだ。台湾の人々の主な移動手段であるバイクをキャンパス内で見かけなかったのは意外であった。飲食店もキャンパス内に数多く出店していて、キャンパス内だけで生活が完結できるほどの利便性の高さが魅力的だ。

日本人留学生との交流

今回は清華大学の日本人留学生の方々にお話を伺った。国際学士班には、各学年に 10 人前後の日本人が在籍し、多様な国籍の学生と交流できる国際色豊かな環境となっている。1、2 年では中国語を中心に学ぶが、3 年目からは専門分野(理系・文系)を選択する「2+2」形式の国際学士課程がある。例えば、経済学を専攻する場合、専門的知識を扱うため 2 年のうちから関連科目を履修し始めることになる。選択後でも合わないと感じたら一定の条件の下で変更が可能である。受験方式は、自伝、評定、先生からの推薦などがあり、自力で出願する学生だけでなく、留学先を教えてください日本企業のサポートを通じて入学する学生もいます。台湾の大学は 9 月入学のため、日本の高校を卒業後の半年間、中国語や英語の勉強を徹底的に行う学生が多いそうだ。



【感想】

想像よりも日本人留学生が多いことに驚いた。清華大学は、留学生に対するサポートが充実しているため、何かあった時にも安心だ。英語だけではなく、中国語も話せるようになる必要があるそうだ。言語を学ぶのは大変だが、その経験は、就職やその後の人生に役立つそうだ。進路を考える上で、台湾への留学という選択肢が広がった。

【3月18日（水）午前】 清華大学内にあるナノテクセンターを訪れた。

半導体の概要

国立清華大学の概要と、半導体についての説明を聞いた。清華大学は昔から研究に力を入れていて、ナノテクノロジー研究の先駆者であることがわかった。また、半導体の原理や利用方法について理解できた。半導体にナノテクノロジーがどのように利用できるかについて知見が深まった。半導体やナノテクノロジーの可能性について学ぶことのできる貴重な機会となった。

クリーンルームの概要

クリーンルームとは、空気中の浮遊微粒子（ホコリや塵）や微生物に加え、温度・湿度・圧力までが厳密に管理・制御された清浄度の高い空間である。実際にクリーンルームへ入室するにあたり、専用の帽子や靴、衣服を着用し、外部からゴミが持ち込まれないよう徹底した対策がとられた。さらに、入室前にはエアシャワーと呼ばれる小部屋に入り、強い風によって衣服や身体に付着したホコリやゴミを除去した。これらの工程を通して、クリーンルームの清浄環境が非常に厳格に維持されていることを改めて実感した。

プラント設備

プラント設備とは、工場などで製品を生産するために必要な機械や装置、配管、制御システムなどをまとめた大規模な設備のことである。今回、プラント設備の内部を見学させていただき、普段は見ることができない装置や仕組みを実際に間近で知ることができた。また、イオンなどの不純物が含まれていない純粋な水で手を洗い、水道水との違いを体験した。見学を通して、設備の規模の大きさや安全に配慮された仕組みに驚き、ものづくりを支える重要な役割を担っていることを知ることができた。

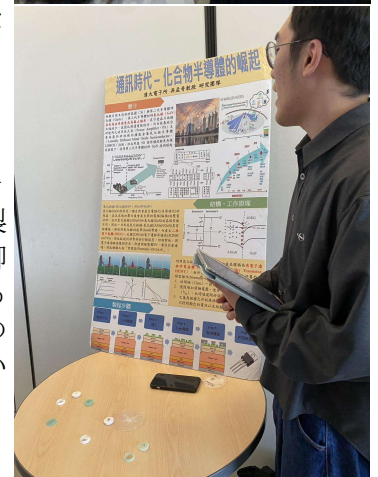
ポスター発表

ポスター発表では、実際にナノテクノロジーを利用して研究を行っている方々の発表を聞いた。ナノテクノロジーを利用することで半導体を小型化したり、製造コストを削減したりできることや、半導体を流れる電子の動きを適切に制御し、漏れ出る電流を削減できるようになることがわかった。半導体を小型化することで、従来通りの体積でより高い性能のスマートフォンが作れるという内容の説明があり、ナノテクノロジーがこれからの世界にとっても大きな影響を与えていくものであることがわかった。

【感想】

目に見えないナノスケールの世界を制御するために、徹底的に管理されたクリーンルームの空気感に驚いた。この清潔な空間に、台湾の半導体産業を支える技術の根源を見た気がした。また、原子レベルの操作が私たちのスマートフォンやPC、そしてAIを形作っているのだと感じた。

ポスター発表では、半導体や医療など幅広い分野の研究について知ることができ、特に半導体について理解を深めることができた。また、プラント施設の見学では、実際の装置を間近に見るなど貴重な学びとなった。これらの経験を通して、実社会での応用について実感することができ、とても有意義な時間だった。



【3月18日（水）午後】 国立清華大学内にある先住民科学開発センターを訪れた。

トラクバン

私たちはバンブーハウスを訪れ、様々な体験をした。その中で、私たちは台湾の先住民の伝統的な家である「トラクバン」について、その模型を見ながら学んだ。この家は12～13歳の集落の男子の訓練のために使われていた。ここで、彼らは集団生活をする中で、伝統的な作法やルール、狩猟、そして成人としての勇気など、様々なことを身に付けていた。また、地震の多い台湾ならではの特徴も見られた。建物の中央の床下には石を詰めた漏斗型の構造があり、これによって建物全体の重心を下げ、地震に耐えられるようにしていた。さらに、その構造自体が地震の揺れと逆に振れることで、建物に伝わる地震の軽減を可能にしていた。この技術は現代にも生かされており、台湾の代表的な観光名所である台北101は同様の構造が使われている。先住民の知恵は決して現代に劣るものではなく、むしろ私たちにとって新たな視点を与えてくれるものかもしれない。



Go Go Giwas!

また、私たちはバンブーハウスの中で「Go Go Giwas」というアニメを見た。このアニメは、世界の映画祭で数々の賞を受賞している。可愛い登場人物が先住民の生活を送る様子を通して、先住民の文化と知識を学ぶことができる作品だ。主人公の少女 Giwas の周りで起こる様々な問題を独自の知恵を駆使して解決していく物語で、とても没入感があった。特に「トラクバン」に関する話は、現在とは違う社会システムについて理解できるような展開になっており、面白かった。

終わる頃には、全員がオープニングソングを口ずさんでしまうほど「Go Go Giwas」というアニメが好きになっていた。

【感想】

現在よりも使えるものや様々な情報が少ない中で、先住民は知識や自然を活用し、いろいろな工夫をこらして生活していたということを知り、とても興味深いと思った。VR体験や模型、建物の見学、伝統的な遊びを体験することなどを通して、先住民の生活について理解を深めることができた。特に、コマ遊びの体験では、友達と一致団結して楽しむことができ、とても思い出に残った。

「Go Go Giwas」というアニメが印象的だった。ストーリーの展開とともに、伝統的な建物の工夫や、昔ながらの習慣について、子供にもわかりやすいような内容で説明されていて、理解しやすかった。かわいいキャラクターたちが魅力的で、虜になってしまった。先住民や伝統的な文化を学んで、自分の視野を広げることができたので、このような体験をすることができて良かった。

【3月19日（木）】 台北市内にある故宮博物院・国立中正紀念堂を訪れた。

概要

台湾の故宮博物院（正式名称：国立故宮博物院）は、台湾の台北市北部に位置する世界屈指の博物館であり、中国歴代王朝の文化財を体系的に保存・展示している施設である。その起源は中国・北京の故宮（紫禁城）に収蔵されていた皇帝のコレクションにあり、1949年の国共内戦の際に貴重な文物の一部が台湾へ移送されたことで、現在の博物館の基盤が築かれた。

所蔵品は約70万点にのぼり、書画、陶磁器、青銅器、玉器、漆工芸、文房具など非常に幅広い分野にわたる。これらは単なる美術品ではなく、中国の政治・文化・宗教・生活様式を伝える歴史資料としても重要な価値を持つ。特に、翡翠で作られた「翠玉白菜」や、豚の角煮に似せて彫刻された「肉形石」は、その精巧さとユーモア性から世界的に有名であり、多くの観光客の注目を集めている。また、収蔵品の保存状態を維持するため、展示品は定期的に入れ替えられており、訪れるたびに異なる展示を楽しむことができる点も特徴である。



象牙球

館内には「象牙球」というものが展示されていた。象牙球とは中国で作られていた非常に精巧な伝統工芸品である。外側の球の中に、一回り小さな球があり、その構造が連続してマトリョーシカのようにになっている。注目すべきはこの複雑な構造が一つの象牙の塊から削り出されていることだ。この像全体が一つの物から作られているとは見た時はとても思えなかった。当時の職人の技術力や集中力には驚かされる。現代の職人の技術では再現不可能だそうだ。清の時代に発展し、皇帝への献上品や海外への輸出品として珍重された。しかし現在では、象の保護を目的としたワシントン条約により象牙の取引が禁止されているため、大切に保管されている。



白菜・角煮

清朝時代の作品で、一個の翡翠（ひすい）から彫り出されている。この作品の最大の特徴は、石がもともと持っていた「白」と「緑」の色ムラを、白菜の白い茎と青々とした葉に見立てて彫り分ける「巧彫」という技法が使われている点である。白い茎は「純潔」を象徴し、葉の上に彫られた2匹の昆虫（キリギリスとイナゴ）は、一度にたくさんの卵を産むことから「子孫繁栄」を願う意味が込められている。もともとは清朝の光緒帝の妃である瑾妃（きんぴ）の嫁入り道具として宮殿に飾られていた。

「豚の角煮」に類似したこの作品は、層状の模様を持つ天然の碧玉（ジャスパー）という石で作られている。石本来の天然の色層をそのまま「皮・脂身・赤身」に見立てて加工した。特に表面には、煮込まれた豚皮の質感を出すために細かな穴を穿って毛穴を表現し、さらに上部を染色することで、独特の光沢まで再現している。天然石が持つ独特の色彩と、高度な観察眼と写実的な技術が融合した、清代を代表する巧彫の逸品として高く評価されている。



国立中正紀念堂について

中正紀念堂は、台湾の初代総統、蔣介石を追悼し台北に設立された巨大な記念施設である。台湾の3大観光名所の1つで、現在は民主化のシンボルである「自由広場」として、台北市民の憩いの場となっている。敷地内には中心に鎮座する青と白の紀念堂のほか、国家劇院、国家音楽庁、整備された庭園があり、本堂下の1階正面「民主大道」にて行われる衛兵交代式は非常に人気で、観光客で賑わっている。

建物の構造

1980年に完成した本堂は高さ約70メートルを超え、孫文が唱えた「八徳」（忠・孝・仁・愛・信・義・和・平）を体現する八角形の屋根、屋根の青天白日徽章が特徴的である。蔣介石の銅像が中国大陸の方角を向いて座す配置、そして階段の段数が蔣介石の享年89を暗示するなどの細やかな設計は、蔣介石の追悼と中国文化の象徴となっている。

中正紀念堂の賛否について

中正紀念堂の賛否については与党と野党の対立が激しく、世論も二分されている。蔣介石は中国大陸から台湾を守り、経済発展の基礎を築いた功績がある一方で、言論・思想の自由が統制され多くの人々が不当な弾圧を受けた、「白色テロ」と呼ばれる負の時代を築いたことから、改修・内部展示・呼称などについては今現在も議論が続いている。

【感想】

国立中正紀念堂の本堂部分や門の大きさに驚いた。また、蔣介石（中正）の銅像の向いている方向は、故郷である中国大陸の方であることや紀念堂の屋根の形が中国の伝統的な美德である八徳を表していたり、本堂までの階段の段数は蔣介石が亡くなった時の年齢であったりと、小ネタが多くて面白かった。紀念堂の規模感を見たことで、蔣介石が台湾建国において大きな功績を残したことがよく伝わった。

台湾の国立中正紀念堂を訪れて、まず圧倒されたのは建物の壮大さと空間の広がりでした。中央にそびえる蔣介石の像は非常に大きく、その存在感から彼が当時どれほど強い影響力と権力を持っていたのかを実感しました。衛兵交代式の整った動きや、広場に集まる多くの観光客の様子から、この場所が現在では人々に親しまれる観光地としての役割も持っていることに気づきました。また、白と青を基調とした美しい建築や細かな装飾からは、歴史的な重みだけでなく芸術的な魅力も感じることができました。

【3月19日（木）夕方】 新北市にある九份を訪れた。

怪獣特集

九份での活動中、「怪獣特集」と題された施設を訪れた。入り口や内装がお化け屋敷を思わせる不気味な作りとなっており、入店した直後は恐怖を感じた。しかし、店員の案内や対応から推測し、そこが単なるお化け屋敷ではなく、仮装をして写真を撮るための店舗であると理解した。

状況を把握した後、実際にキョンシーなどの怪物や化物の衣装を身にまとい、写真撮影を行った。言葉の壁はあったものの、店員が非常にフレンドリーで親切に接してくれたため、戸惑うことなくスムーズに撮影を行うことができ、大変助けられた。結果として、九份における印象深い体験となった。



雨の中での散策

当日は少し曇りで日差しも無く過ごしやすい天気だったが、九份へと向かうバスに乗っているうちにしとしとと雨が降ってきた。ガイドさん曰く、この時期は8割が雨だという。初耳だ。九份はその景観が美しいながらも急勾配の階段がなかなかきつい観光地であるが、そんな立地と人ごみの中雨が降ればどうなるかは想像に難くない。もはや登山である。視界に入ってくる情報以外全て過酷である。しんどいにも程があったが、ちょっと顔を上げるだけで景色に感動できるので運動不足解消にいいかもしれない。九份を訪れる際はレインコートを持参することをおすすめする。

九份は「千と千尋の神隠し」に出てくる湯屋のモチーフではないかといわれているが、ガイドさんの説明によると全く違うらしい。九份は上から下までジブリグッズが沢山販売されているのを見て、地元の方の熱い意志が感じ取れた。



【感想】

九份の街を歩くと、全体を包み込むような臭豆腐の独特な香りが漂い、台湾という異国にいることを強く実感させられた。当日はあいにくの雨模様で、濡れた急な石段を歩くため、どうしても足元ばかりに気を取られがちであった。しかし、ふと立ち止まって頭上を見上げると、そこには無数の赤い提灯が連なり、雨に煙る空を温かく照らし出していた。雨粒を反射してぼんやりと浮かび上がるその幻想的な美しさは、足元の苦勞を一瞬で忘れさせるほどで、私の心に深く刻まれる光景となった。

九份には魅力的なお店が沢山あった。阿妹茶楼などの有名なお茶屋さんに加えタピオカ、ヌガー、フルーツジュース、何かしらの肉、臭豆腐などの屋台や雑貨屋たちがとところせましと立ち並んでいる。台湾ドルの金銭感覚をつかまないうまま行くとお金が凄まじい勢いで飛んでいくので、九份に行く際は残金をしっかり確認して行くといいだろう。

臭豆腐を知っている人はどのくらいいるのだろうか。発酵食品の一つだが、この世の終わりのような臭いがして近づくことすらままならないので食べたことのある人はぜひ感想を教えてください。

【3月20日（金）】 台北市内にある台北市芳和実験中学を訪れた。

歓迎式

MRTから降りて歩いていると、校舎の前には芳和実験中学の皆さんが大勢集まり、私たちを温かく迎えてくれた。生徒の皆さんは、それぞれバディの名前が書かれた紙を掲げていて、その光景から歓迎の気持ちが強く伝わってきた。それぞれが自分のバディと顔を合わせ、簡単な自己紹介や挨拶をした。最初は少し緊張したが、バディが優しく話しかけてくれたおかげで、少しずつ会話ができるようになった。そして、バディが教室まで案内してくれながら、学校の様子や普段の生活についても教えてくれた。校内の雰囲気や生徒の皆さんの様子から、とても活気のある学校だと感じた。その後、両校の代表の先生方による英語での挨拶が行われ、お互いにお土産を交換し、交流の始まりにふさわしい和やかな時間となった。

交流会

交流会では初めにそれぞれ学校紹介を行った。先に芳和実験中が紹介をしたのだが、とても流暢な英語で話し、原稿を暗記しているだけでなくこちらに「伝える」という話し方で、聞いていてとても興味をそそられた。一高生もこれまでの5日間で慣れてきた英語で最後に一言アドリブを入れるなど、芳和中からの良い刺激を活かしていた。その後はグループごとや全体でゲームをして仲を深めた上でグループディスカッションをした。あるグループではハイキングをし、あるグループではお菓子パーティーをするなど、芳和中の研究発表を聞くと共に、会話を弾ませながらより仲を深められたと思う。

Training

昼食後、芳和実験中学で4月に行われたという、島での研修旅行について話を聞いた。研修のまとめとして1cm程の厚みのある冊子を作成しており、それを見せながら教えてくれた。綺麗な海が特徴的な島で、青々とした美しい写真が掲載されていた。島で行った研修は多岐にわたり、海に飛び込んだり、ローカルな芋をとったりなどのアクティビティが行われていた。まとめ冊子の作成にあたって生徒それぞれが数ページを担当していたようであり、全体的におしゃれなレイアウトであったがその中にも個性が見られた。特に印象的だったのは、絵が得意だという生徒が、挿絵形式で景色や思い出を描きつつまとめたページである。日本で研修のまとめという、レポートなど堅苦しい物になることが多い印象があるため、とてもよい取り組みだと思った。4月に大型の旅行を行うというのは学年が4月始まりの日本で行うには難しい。かといって冬など後期は受験などで忙しく、夏は近年酷暑である。そう言った意味で、4月の研修は台湾だからこそできる行事なのかもしれない。



【感想】

イントロダクションと学校紹介で、とても前衛的な教育体制の学校だなと感じたが、その後の体験授業やプレゼンテーションを見て、その質の高さに感動して、教育体制にも納得がいった。特にプレゼンテーションは、今すぐにもで済済社会で通用しそうなレベルの高さで、日本の学術との格差を感じてしまった。全体的に自分たちが取り組んでいることに前向きで、日本のみんなにも見てもらって参考にしてほしいなと思った。

学校訪問のあと、バディに夜市に着いてきてもらったが、途中バディと知り合いの交換留学生のグループとであった。中には日本人もいて、思わぬところで留学の身近さを感じることが出来た。そのグループを観察していると、みんな英語を話せることはもちろん、日本人が中国語を話したり、台湾人が日本語を話していて驚いた。どうやらみんな勉強中らしかった。言語の勉強が生活の一部となっている彼らを見習いたいと考えた。